

ともしび双書

神奈川県福祉作文コンクール 入選作品集



令和6年度版

まえがき

福祉作文コンクールは、昭和52年から始まり、今年で47回目となりました。次代を担う子どもたちに「たすけあい」や「思いやり」の心が芽生え、「ともに生きる」社会が実現することを願って実施してまいりました。

今年、県内の小・中学校合わせて149校から4,576編の応募がありました。児童・生徒数が年々減少していく中で毎年多くの方に参加していただいています。

応募作品は小・中学生別に、県内市区町村ごとの地区審査会および県最終審査会を行い、このたび、最優秀賞16編、優秀賞20編、準優秀賞20編の計56編の入選作が決定いたしました。

本作品集は、入選作品の中から、最優秀賞16編を掲載したものです。どの作品も、体験や経験を通じて感じたこと、考えたことなどが自分自身の言葉で丁寧にかかれていきます。広く県民皆さまの目に留まり、お互いを思いやり、たすけあい、支え合えるような優しい気持ちや社会全体に広がっていくことを願っています。

本来ならば、すべての入選作品をご紹介したいところですが、誌面の関係で、優秀賞及び準優秀賞は作品の題名・学校名・氏名を掲載させていただきましたので、ご了承ください。

なお、作品は、児童、生徒の気持ちを尊重し、原則として原文どおりに掲載しておりますことを申し添えます。

結びにあたり、コンクールに参加した小・中学生の皆さん、指導にあたられた先生方、ご家族の皆さま、ご多忙のなか審査をお願いしました委員の方々に、心よりお礼申しあげます。

また、運営にご協力くださいました神奈川県、神奈川県教育委員会、各市町村教育委員会、日本放送協会横浜放送局、(株) テレビ神奈川、(株) 神奈川新聞社、(公財) 日揮社会福祉財団の皆さまに深く感謝申しあげます。

令和6年12月

社会福祉法人神奈川県共同募金会
社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会

審査にあたられた方々

日本放送協会横浜放送局
 コンテンツセンター長
 株式会社テレビ神奈川
 営業局次長兼 営業推進部長
 株式会社神奈川新聞社
 クロスメディア営業局次長兼 出版メディア部長
 公益財団法人日揮社会福祉財団
 常務理事兼 事務局長
 神奈川県福祉子どもみらい局福祉部
 地域福祉課 長
 神奈川県立総合教育センター
 企画調整課 主査兼 指導主事
 社会福祉法人神奈川県共同募金会
 常務理事 事
 社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会
 常務理事 事

花岡 信太郎
 伊藤 修身
 土岐 邦彦
 佐藤 恭平
 笠井 熱史
 徳丸 豪
 中島 孝夫
 深井 康信

(順不同/敬称略)

第47回神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 目次

小学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

ふくのひ

小田原市立桜井小学校

一年 伊藤真乃花……………1

神奈川県教育長賞

わたしのだいすきなママ

海老名市立杉本小学校

三年 山下 結愛……………3

日本放送協会横浜放送局長賞

はじめましてを何度でも

厚木市立南毛利小学校

四年 白須 乙羽……………5

tvkかながわMIRAI賞

私のおばあちゃん

秦野市立西小学校

五年 福田 風菜……………7

神奈川新聞社長賞

私の右腕

横須賀市立桜小学校

四年 木次谷 藍……………9

日揮社会福祉財団ふれあい賞

手話教室が教えてくれたこと

横浜市立平戸小学校

六年 森山 和奈……………11

神奈川県共同募金会会長賞

私達にできることは

函嶺白百合学園小学校

六年 西堀 愛禾……………13

神奈川県社会福祉協議会会長賞

「思いやりの心でインクルーシブ」

松田町立松田小学校

六年 吉田 心花……………15

中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

支援のカタチ

開成町立文命中学校

三年 井上 心結……………17

神奈川県教育長賞

同い年になった姉

大井町立湘光中学校

一年 細田 心奈……………20

日本放送協会横浜放送局長賞

「私の母」

開成町立文命中学校

三年 三鬼 桃華……………23

t v kかながわM I R A I賞

あたりまえ

横浜市立篠原中学校

二年 矢部 宮瑚……………26

神奈川新聞社長賞

人のためには自分のため

伊勢原市立中沢中学校

一年 田中 希美……………28

日揮社会福祉財団ふれあい賞

「障害者と生きる」

秦野市立北中学校

二年 福本 雅治…………… 31

神奈川県共同募金会会長賞

支え、支えられる社会へ

伊勢原市立伊勢原中学校

三年 森住 芽依…………… 34

神奈川県社会福祉協議会会長賞

小さな福祉

大磯町立大磯中学校

三年 小江 哲朗…………… 37

優秀賞・準優秀賞入選者名簿…………… 41

小学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

ふくのひ

小田原市立桜井小学校

一年 伊藤 真乃花

わたしは五さいのときからおかあさんのしごとのおてつだいをしています。それはふくをえらぶことです。おかあさんはじゅうどのしょうがいしゃのしせつではたらいています。しせつにはくるまいすのひとやめがみえないひとがいます。ふくがすきなひともいればきるのががてなひともいるそうです。おかあさんがえらぶのはふくをきるのががてなひとのふくです。わたしはよくわからなかつたけど「かわいいピンクのふくにしたら。」とおかあさんにいきました。おかあさんはすこしおどろいて「いつもきやすいふくがよいとおもっていたけれどかわいいのもすきかもしれないね。」といって、わたしがえらんだふくをかいました。

あるひ、おかあさんがこのまえわたしがえらんだふくをりようしゃさんがおうちにきてかえったら、かぞくがとてもよろこんでいたはなしをききました。いつもはすぐにぬぐけれど、かわいふくだといったらニコニコしてきにいっていききました。いままでよごれてもいい、めがみえないからいろもきにしていなかっただけ、それはわたしたちがそうだとおもってただけでほんとうはかわいいろやフワフワしたふくがきたかったのかもしれない。ありがとうといっていたとおかあさんからききました。

わたしがかわいとおもってえらんだふくをりようしゃさんがかぞくもよろこんでくれてうれしくおもいました。それから、おかあさんがりようしゃさんのふくをかうひはわたしもいっしょにえらんでいます。すてきなふくをきてわらってくれていたらいなとおもいます。もうすこしおおきくなったらしせつにいってりようしゃさんとおはなしたりおてつだいしたりしてみたいなとおもっています。

最優秀賞

神奈川県教育長賞

わたしのだいすきなママ

海老名市立杉本小学校

三年 山下 結愛

わたしのママは元気です。しかしみんなにはないしよにしています。本当は色々なびょう気があります。

わたしのママのびょう気は、ほかの人には見た目で分からないのでこまっています。ママは車いすにのっているわけでもないし、目が見えないわけでもないですが、体の中がこしように、体にきかいがついています。そのため、電車の中で具合がわるくなっても元気そうに見えるため、せきをゆずってもらえません。通りすがりにぶつかってくる人もいます。

そして、びょう気のせいでつかれやすく、家ではすぐ横になってしまいます。そんな時、わたしは自分でごはんを作ります。目玉やきをフライパンでやいたり、れいとう食品を温め

て弟の分も作ってあげます。弟は、わたしの分ものみ物を用意してくれませう。

そこでわたしは、えきや、ショッピングモールで休けいする場所があつたらいいなと思ひました。それはベンチではなく、ほかの人の目を気にせず横になれる場所です。

ママが外で具合がわるくなつた時に横になれたりすると今よりも外に出やすくなつたり、買ひ物をしやすくなると思つたからです。

ニユースを聞いていて、大学の女子トイレに休けいする場所があると知りませう。それは、具合がわるくなつた時や、ちよつと休みたい時に横になれる場所です。

ママみたいに見た目では元氣そうに見えるけど、びよう気や、しょうがいのある人がいるということを知つてほしいです。また、ほかの人の目を気にせずちよつと横になれる場所がこの町にもあつたらいいなと思ひませう。

最優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

はじめましてを何度でも

厚木市立南毛利小学校

四年 白須 乙羽

九十七才のひいおばあちゃんがわたしのじまんです。絵がとてうまくて、手先が器用でとてもやさしいひいおばあちゃんです。いっしょにご飯を食べに行ったり、よく遊んだりしていました。しかし、コロナが流行し、会えなくなってしまった数年の間にひいおばあちゃんの世界が変わりました。ひさしぶりに会ったひいおばあちゃんは、わたしのことをわすれてしまっていました。にんちしようと言うそうです。

「あれ、このおじょうちゃんはだあれ。」

と言われた時、わたしの知っているひいおばあちゃんではないように感じました。とてもシヨックでした。でも

「ひいおばあちゃん、おとはだよ。」

と言うとひいおばあちゃんはいつものやさしいえがおで、

「おとはちゃんおかし食べる。」

とおかしをくれました。その後、ひいおばあちゃんがデイサービスという所で作成してきたという、ぬりえを見せられました。色使いがとてもきれいで、ていねいで、紙から出てきそうなくらい上手でした。何度もきれいな絵をかいているひいおばあちゃんには、何回絵をかいてもわたしは勝てません。

それから、ひいおばあちゃんの日課であったおはかまいりは、わたしたち家族が行っています。そして、ひいおばあちゃんからは、わたしはぬりえを見せてもらって、絵の勉強をしています。会うときはいつも自己紹介からです。でもすぐにまた仲良くなります。ひいおばあちゃんの心は変わらないからです。ひいおばあちゃんがやるのがむずかしくなった事は、わたし達でやりたいと思います。だから、もつとわたしに絵を教えてもらいたいです。やっぱりひいおばあちゃんはわたしのじまんです。

最優秀賞

t v k かながわ M I R A I 賞

私のおばあちゃん

秦野市立西小学校

五年 福田 風 菜

私のおばあちゃんは、にん知しようです。私やお兄ちゃん達が保育園に通っていた時は、いつも保育園に送りむかえをしてくれました。私は、そんなやさしいおばあちゃんが大好きです。

私が小学生になってから、おばあちゃんにはにん知しよくなりました。にん知しよいはいろいろな事を忘れてしまう病気です。そして、治ることはありません。おばあちゃんににん知しよになつてから、前のおばあちゃんではなくなりました。

今年の六月に、おばあちゃんが私の家に来ました。最初は、お母さんが一人でおばあちゃんのかいごをしていました。お母さんが大変そうで、私もいっしょに手伝いました。時どき、

私のことを忘れてしまいます。食べ物やトイレもわからなくなります。夜もねないで、ベッドのさくを叩いたり、さくに足をかけたりしていることもありました。

にん知しようにって何なんだろう。どうして、大好きなおばあちゃんを変えてしまうのだろうと、悲しくなりました。大好きだけど、家でいっしょにすごすのは大変でした。ずっといっしょにいたいけど、かん単なことではないのだと思いました。だから、まわりの力や助けが必要です。お母さんは泣いていました。そんな泣いているお母さんの気持ちがわかっていき、私もいっしょに泣きました。

今はしせつに入り、落ち着いて生活をしています。私は福祉のことについて知りました。困っている私達を助けてくれたり、私達の辛い気持ちによりそってくれました。

これから、高れい者もつと増えていく時代が来ます。私も福祉に関わる仕事をしたい、困っている人達の力になりたいと思いました。そして、色んなことを教えてくれたおばあちゃん、今でも大好きです。

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

私の右腕

横須賀市立桜小学校

四年 木次谷

藍

私は一才の時に病気になる、二才の時に右腕を手術しました。それで、右腕のひじから下がありません。右腕が使えないと不便なことや嫌なことがあります。

不便なことは、食器を持ちながら食べることや、メモを持ちながら書くことができせん。洋服を着ることが人より時間がかかります。難しいことがたくさんあるけど、学校では先生が手伝ってくれたり、友達ができないことを一緒にやってくれます。家だと、お母さんや家族が手伝ってくれます。みんなが協力してくれるから、私は毎日普通に生活ができています。先生、家族、友達には本当にありがとうと言う気持ちでいっぱいです。特にお母さんには、私が病気になる時一番近くにいてくれたし、私は本当にいい人達に恵まれたなと、思います。

でも、嫌なこともあります。知らない人にコソコソ腕のことを話されたり、ずっと腕をのぞかれたり、「あの子腕ないかわいそう」と言われたこともあります。大人に言われることもあります。悲しくなるけど、優しい言葉をかけてくれる人もいます。

昔、私が小さいころ会ったおばあさんに「あなただけのすてきな宝物の腕ね」と言われたことがあります。私が小さい時の話で覚えていなくて、お母さんからこの話を聞いた時にこんなあたたかいことを言ってくれる人もいるんだと、とてもうれしい気持ちになりました。そんなあたたかいことを言ってくれる人が少しでもいるだけで、自分だけの宝物の腕を好きになれる。私もそのおばあさんや先生、友達、家族のやってくれたように困ってる人、自分みたくにどこかが不自由な人、いろんな人の手伝いをしたいです。そして、優しい言葉をかけられる人に私もなりたいです。

最優秀賞

日揮社会福祉財団ふれあい賞

手話教室が教えてくれたこと

横浜市立平戸小学校

六年 森山和奈

「耳の不自由な方たちは、大丈夫かな。」

今年の一月一日に起きた、能登半島地震の被災地の様子や避難所の様子をテレビで見ても心配になりました。昨年、戸塚区社会福祉協議会の手話体験講座を受講し、耳の不自由な方は、外見では耳が不自由とは分かりにくく、困っていても周りの人に気づかれなかったり、災害が起きたときは、正しい情報が得られないなどで、とても不安な思いを持っているということを学んだからです。もし災害が起きて、手話が上手にできたら、耳の不自由な方の力になれるかもしれないと思い、手話教室に通うことにしました。

手話教室で学んだことが、二つあります。一つ目は、「自信を持ってコミュニケーションす

ることの大切さ」です。正しい手話を覚えていないと、正しく伝わらなかつたり、全く別の意味になってしまいます。あいまいな手話表現をせず、自信を持って表現できるよう、動画やテキストでしっかり手話を身につけたいです。二つ目は、「相手のことを思いやりながらコミュニケーションすることの大切さ」です。私がうまく手話の表現ができなくて不安になっていたとき、手話教室の先生が、優しい笑顔でいてねいに教えてくれたり、明るい笑顔ではげましてくれました。言葉はなくても、表情から先生の気持ち伝わり、心が温かくなりました。相手を思いやることで、自然と気持ちは表情に表れるのだと気づかせてくれました。

手話教室は、手話だけでなく、コミュニケーションをする上で大切なことも教えてくれました。毎日の生活にも、活かしていきたいです。そして、災害はいつ起こるか分からないからこそ、これからも手話の勉強を続けたり、周りの方たちに目を配り、相手を思いやる気持ちをもち続けていきたいです。

最優秀賞

神奈川県共同募金会会長賞

私達にできることは

函嶺白百合学園小学校

六年 西堀 愛 禾

私は二〇二四年一月一日に起こった能登半島地震をきっかけに何か私達にできることはな
いかと学校で話し合い、その結果募金活動を行うことにしました。活動場所は通勤通学の人
の多い小田原駅と学校の最寄り駅である箱根の強羅駅の二カ所で学校全体で手分けをして行
いました。募金活動は初めての経験だったので緊張していましたが、みんなで声を合わせて行
呼びかけることができました。声を上げ続けていると一人、また一人と足を止めて募金に協
力してくださる方々がいました。そして私達の前を立ち去る前に「募金活動、がんばってね。」
という言葉をかけてくれる方もいました。だんだんと募金箱の重みを感じるたびにとてもう
れしく、マスクの下で少し笑みがうかび心が温かくなりました。その後もみんなで声を合わ

せて一生けん命がんばりました。小田原駅はターミナル駅なので電車から降りるお客さんがたくさんいて、ちようど帰宅時間になると募金してくださる方が最も多かったです。活動していると人とのコミュニケーションがたくさんあり、私はマスクをしていたので表情を分かりやすくし、感謝の気持ちを大きく表現するように意識していました。夕方の四時頃から五時近くまで駅に立っていてとても寒かったけれどその時、寒さのことは何も感じないくらい私は夢中だったんだと思います。

私はこの活動を通してたくさんの方の温かさや優しさを受け取ることができ、貴重な体験でした。社会のために役立つことができてよかったです。その募金が能登半島の方々に届いて少しでも助けてあげられたらなと思います。私達にできることは小さな事だけれどこのような活動をすることで一人でも多くの人に喜んでもらえたらうれしいです。

最優秀賞

神奈川県社会福祉協議会会長賞

「思いやりの心でインクルーシブ」

松田町立松田小学校

六年 吉田 心花

私の通う松田小学校の児童会目標は、「思いやりの心を大切にして笑顔の木を育てよう」です。私が考える思いやりとは、相手の立場になって考え、困っている人を自分から助けることだと思います。

私には、知的障害のある兄がいます。兄は自分の思いをうまく伝えることができず、周りの方に迷惑をかけてしまうことがあります。しかし、兄の周りには思いやりのある人がたくさんいます。それはテニスの仲間やテニスのコーチ、小学校の頃の介助員さんです。私達が小さい頃からテニスを教えてくれていたテニスのコーチは、何度もわかりやすくジェスチャーも交えながら説明してくださったり、得点の数えられない兄でも他のみんなと楽しく過ごご

せるようにコミュニケーションをとり不安にならないよう話かけてくれます。兄が小学校の時の介助員の先生は高校生になった今でも兄のことを気にかけてくださり、長期の休みには、兄に合った勉強を教えてくださいたりピアノや楽しいゲームなどを考えてくれたり、安心して楽しく過ごせる場所をつくってくれています。兄はとても楽しむことができます。

みんなありのままの兄を受け入れ一緒にすごしています。兄のことを大切に思いやさしく接してくれているみんなのように私も兄を大切にしていきたいです。そして私も困っている人を助けられる思いやりの心のある人になりたいです。思いやりの心が広がり笑顔があふれる世界になってほしいです。

そうすれば、インクルーシブな社会となりどんな人でも地域で当たり前前に存在し、安心して生活することができる社会が実現すると思います。

中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

支援のカタチ

開成町立文命中学校

三年 井上心結

皆さんは人からの親切な行動を素直に受け取れなかった事はあるだろうか。せつかくの善意でしてくれた行動に「ありがとう」の気持ちと、ほんの少しの「モヤッ」とした感情が生まれたことがある。その瞬間、そんな自分が嫌だった。それは学校の下駄箱での話だ。空いている下駄箱が一番上にしかなく、少し高い位置だったがそこに私は靴を入れた。帰りに友人が「取ってあげるね」と一番上に入った私の靴を取ってくれた。私は、「ありがとう」と言葉を返した。ただ友人は自然に親切な行動をしてくれただけ。それなのに私は、少しだけ「モヤッ」としてしまった。何でそのような感情を抱いてしまったのだろうか。

私は小学校の頃から低身長でずっと病院に通っている。毎月の注射や血液検査・レントゲン。毎日の服薬。慣れたけどやっぱり大変だったし嫌だった。身長が低いことで何をするにも一番前、目立つことが苦手な私はそれがとても苦痛だった。話を戻すと靴は自分で入れたのだから自分で取れるのだ。「自分で取れるのに……」今までの嫌だった経験が積み重なり、私の心の中ではせっかくの友人の優しさが「小さい子扱いされた」という思いに変換されてしまった。それがまさに「モヤッ」の発信源だった。友人は何も悪くない。

そんな話を母に相談したところ、母はまさに私と逆の立場で行動してしまい、反省しているという話をしてくれた。母の職場には、車椅子の方がいらっしやるそうだ。母はその方が職場の出入りをする時に、扉を開けて待っていたことがあった。その時は「ありがとう」と言われ、普通に過ごしていたがよく観察してみるとその方は何度も出入りをしており、扉の周りにいた他の方は特に補助をすることはなかった。そこで母は「余計なことをしてしまっただ」と思ったそうだ。周りの方は決して不親切ではなく、あえてお手伝いをしていないのだろうと母は気づいた。母は続けて職場での話をしてくれた。避難訓練の際その方は、「後で避難場所で合流しようね」とみんなに声を掛けられていた。実際の災害時、周りに人がいるとは限らない。その時のため、まずは一人で避難できるようにという意図だった。そして、職場の方はこう続けた。「本当に困った時は皆で担いで避難する準備はできているから」と。母はこれが本当の支援なんだと思ったそうだ。私はこの話を聞いて、いざという時に手を貸してもらええる安心感という土壤がある上で、本人の力で何でも行動できるように良い意味で「手

を離すこと」が出来ていると感じた。必要以上の支援はされる側にとつては負担になってしまふこと・本来できることを妨げてしまふこともある。扉を開けることも一つの支援だが、もう一步踏み込んで、心地良く居やすい環境を共に造ることも大事な支援だと思う。まずは躊躇なく声掛けをし、支援することはとても大切なことだ。その次は、その人を良く知りその人にあつた支援とは何かを考えて行動することが必要なのではないだろうか。そう考えると支援とは、特別なことではなく人と人とのコミュニケーションそのものではないかと思う。母の職場では、日頃から十分にコミュニケーションが取れているからこそ良い関係性が築けたのだろう。私も友人が靴を取ってくれた時に「ありがとう！でも私、届くんだよね」と少しでも軽く返せば良かった。私の「モヤッ」はコミュニケーションを取ることですら簡単に解消できたはずだ。障がいのあるなしに関わらず、相手を良く知り、自分のことも知ってもらふ。その積み重ねが支援の大切な一步になる。人の数だけ支援のカタチがある。日々のコミュニケーションの中で、私はこの問いかけを忘れずに行きたい。

「あなたのカタチはどんなカタチ？」

最優秀賞

神奈川県教育長賞

同じ年になった姉

大井町立湘光中学校

一年 細田 心奈

私には、三歳上で通信制高校に通っている姉がいる。今この課題作文の中では姉と書いているが、生まれてから姉のことを「お姉ちゃん」と呼んだことはない。幼い頃は愛称だったけど、いつの間にか呼び捨てをしていた。

私にとって姉は、不思議な存在だった。年上だけど、私がすんなりできることなどできるようになるまで時間がかかることが多々ある。一番印象に残っているのは、靴紐の蝶々結びだ。母にやり方を教えてもらい、私はすんなりできたけれど、姉はなかなかできなかつた。泣きながら、一時間位かけてできるようになった。私が逆の立場だったら、諦めていたと思う。辛抱強く練習していたことが、すごいと思った。

私が、小学校六年生の夏休みくらいに、母から「○○のことで話がある」と言われ、何の話だろう…と少しドキドキした。母から聞いたのは、『姉が軽度知的障害と診断された』『様々な面での成長が実年齢よりも三歳くらい遅れている』という内容だった。そっか…。三歳ってことは、私と同じ年なんだな…と思った。

軽度知的障害について私はよく分からなかったので調べてみた。日常生活などが普通に見えるので、周囲から気付かれにくい傾向にあり、誤解されてしまい、様々な面で困難を感じてしまうことがあると書いてあった。確かに姉は、見た目は障害があるように感じない。家族とせずと生活しているから、姉の特徴は知っているけれど、初めて会った人や姉のことを知らない人は、きっと接していくうちに誤解をしてしまうと思う。軽度知的障害の一番辛いところは、その「誤解」だそうだった。

私たちの周りには、見た目でわかる障害を持っている人、見た目ではわからない障害を持っている人がいる。姉のことを知ってから、今まで正直読んでいなかった、学校から配られる福祉のパンフレットを読むようになった。何かの時に助けを必要としている人が身に着けているヘルプマークの存在も知ることができた。知らなかったことを知ることができた。

『知る』ことの大切さを知った。

今回、この作文を書く前に、デリケートなことだから、姉に書いていいかを聞いた。姉はふたつ返事で「いいよ」と言ってくれた。だから、書くことにした。

私が大切だと思うことは、『知る』ということ。そのきっかけは色々なところにある。例えば、

私が今まで読んでいなかったパンフレット。あとは、スマホやパソコンを使って調べてみる。こと。動画では、十代の人が、自分の障害について分かりやすく、発信する人も多い。隠さず発信して理解を広げようとしている。『私はこういう人です』と発信することは勇気がいることだと思うし、素晴らしいことだと思う。

知ることのきっかけは案外身近にあった。そして、気付いていないだけで、私の周りに困難を抱えている人がいるはずだ。その時に、色々なことを知っていて理解できていたら、私にもできる対応があるはずだ。

少し前によく流れていた歌で『見た目に囚われない』という歌詞があった。その通りだと思ふ。人は見た目では分からないことがある。それは、障害があってもなくても一緒だ。その中で、私たちの身の回りで、見た目ではわからない障害を抱えている人がいるのも事実だ。私の姉。苦労していることも多い。けれど、自分にできることを日々頑張っている。普段は呼び捨てだけれど、姉の姿を見てみると、リスペクトを込めて、たまには「お姉ちゃん」と呼んでみるのもいいのかもしれないと思つた。

最優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

「私の母」

開成町立文命中学校

三年 三 鬼 桃 華

私の母は目が不自由である。小学生の頃から母の目の不自由さを身近に感じて育った私は、家族の中で福祉の重要性を深く理解する機会に恵まれた。母が障害を持ちながらも日常生活を送れるのは、母自身の努力だけでなく、周囲の支えや福祉制度の恩恵があつてこそであると強く感じている。

母が視力を失つたのは、私が小学生の頃だった。最初は一部の視力が低下し、その後、徐々に失明へと進行していった。この状況は家族にとつて大きな試練であつたが、母は決して自分を諦めず、私たち家族に対しても決して弱音を吐かなかつた。しかし、目が見えなくなるという事実に向き合う中で、私たち家族はさまざまな困難に直面することになった。

日常生活での小さなことが、大きな障害になることを痛感した。例えば、母が料理をする際、見えない中で刃物を使用したり、火加減を調整するのは危険を伴う。家の中を移動する際にも、家具にぶつかったり、足元にある物につまずいたりすることが頻繁にあった。私たち家族は、母を支えるためにできる限りのサポートを提供してきたが、それだけでは十分ではなかった。

そんな中で、福祉制度が母と私たち家族にとって重要な助けとなった。まず、自立支援医療費助成は、母が通院している医療費を負担してくれる。次にサングラスと白杖を買う際の補助金などが母だけでなく私たち家族にとっても助けとなった。さらに、家族としても、家中の環境をどのように整えるべきか、母が自立して生活するために必要なサポートは何かを具体的に理解することができた。例えば、家の中の段差をなくす、明るさを調整するための照明を取り付ける、また、音声案内がついた電子機器を導入するなど、小さな工夫が母の生活の質を大きく向上させた。

母はお米を炊いたり、洗濯物を畳んだりと自分のスキルを活かした家事を行ったりしている。母は、自分の障害を悲観するのではなく、逆にそれを新たな挑戦と捉え、福祉の力を借りながら前向きに生きていく道を選んだのである。

この経験を通じて、私たち家族は、福祉が単なる助け舟であるだけでなく、個人の尊厳を守り、自己実現を支えるための重要な役割を果たしていることを実感した。

母のように視覚障害を持つ人々が、自立した生活を送れるようにするためには、福祉制度の充実とそれを活用する意識が不可欠であると感じる。私自身も母を通じて得た経験を他の

人々に伝えることで、福祉の重要性を広めていきたいと考えている。障害者が抱える困難は、決してその一人一人で解決できるものではなく、社会全体で支えるべき問題である。そして、その支えがしっかりとしたものであるほど、障害を持つ人々はより豊かで充実した人生を送ることができるのだ。

福祉の力によって、母は目が不自由でありながらも、多くの人々と同じように自立した生活を送っている。その姿は、私にとって誇りであり、また福祉の大切さを教えてくれるものだ。今後、母を支えるだけでなく、社会の中で福祉の重要性を伝え続けていきたいと思う。

最優秀賞

t v k かながわ M I R R A I 賞

あたりまえ

横浜市立篠原中学校

二年 矢部 宮 瑚

私はデュアン症候群を患っている。デュアン症候群は、約千人に一人の頻度で発症する目の病気で、私の場合右目を上手く動かすことができない。また、時々発作のようなものが起こってしまうため、皆と同じように遊んだり、皆とスポーツを楽しむことができない時がある。これが私のあたりまえ。

世界には、多くの人がいてひとり一人違ったあたりまえがある。私のように病気と戦っていく日々があたりまえの人。目が見えないのがあたりまえの人。耳が聞こえないのがあたりまえの人。本当に沢山のあたりまえがある。しかし、皆と自分のあたりまえが違う時、人に責められてしまうことがある。私もそうだった。小学生の頃、皆と目が違うというだけの理

由で「気持ち悪い。」などと毎日言われた。本当につらく悲しい毎日だった。ところが、ある日友人のMちゃんに自分の目は皆と違うということを告白するとMちゃんは優しく、「その目も宮瑚ちゃんの大切な個性だよ！だから大丈夫！」と言ってくれたのだった。その時は本当に嬉しくて嬉しくて涙がこぼれ落ちそうになった。さらに中学校の授業でドッジボールをしていたときに発作が起こってしまった。そんな時Mちゃんは「向こうに行こう。」と、すぐに声をかけてくれたのだ。これは、私自身のあたりまえを知っているMちゃんだけができる行動だ。だが、中学一年生の後期、発作が多くなり早退してしまうことが増えてしまった頃、クラスの友人達が帰る支度を手伝ってくれたり、「一緒に保健室に行こう。」と声をかけたりしてくれたのだ。Mちゃん以外の人に自分自身を受け入れてくれる人や、自分のあたりまえを受け入れてくれる人がいなかったため、本当に嬉しかった。

私は将来、社会が沢山の色々なあたりまえであふれていってほしいと思う。誰にも否定されることのない自分だけのあたりまえで社会があふれた時、社会や世界は今よりもずっと、過ごしやすい場所になると思う。そんな社会や世界にするためにはひとり一人が相手のあたりまえを認める心を持つことが大切だ。相手を認めるということはすぐにはできないことだが今の自分から一歩ふみだしてみれば世界は少し明るくなる。

世界が明るく過ごしやすい場所になっていくこと。これが私の夢だ。

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

人のためには自分のため

伊勢原市立中沢中学校

一年 田中希美

イギリスのBBC放送の「盲目の人が困っていたら？」という実験番組についての記事を讀んだ。視覚障がい者の人の生活上の困難を非障がい者の人にも知ってもらうという企画だ。

その内容は、視覚障がい者の人が横断歩道を渡れずに困っていた時に、ロンドン市民が助けてくれるかというものだった。しかし助けに出る市民は現れず、困っている視覚障がい者の人に一番最初に声をかけて助けたのは日本の留学生だったそうだ。更に別の場所では視覚障がい者が横断歩道の途中で信号が変わってしまうというより危険なケースにして実験を続けた。すると、またも助けたのは日本人であったという。手助けした人は、自転車に乗っていたのだが、すぐに自転車から降りて実験者にかき寄り「信号が変わって危険な状況です、

お手伝いしてもよろしいですか？」と尋ねて、危険な状況から助け出したという。

私はこの記事を読んで、とても誇らしい気持ちになった。と同時に自分は同じ日本人として、そのような行動が出来るのかという気持ちにもなった。

もし同じような状況になった時、きっと私は助けることが出来ないと思った。なぜなら私には、助けるスキル（助けた経験）がたりないからだ。おまけにほんの少し勇気がたりない。それにどんな助けが必要なのか、分からない。困っている人がいたら助けようとする気持ちはあるのだが、そこから行動に移すまでの一歩がなかなか出ない。

私の周りで、進んで困っている人を助けているのは母だ。どういう気持ちで人助けをしているか聞いてみた。「人のためにした事は、必ず自分もしくは自分の大切な人に、巡り巡って返ってくると信じている」と言うのだ。

しかし母は、必ずしも上手く助けられているわけではないというのだ。

電車でお年寄りに席をゆずろうとしても、「次なので」と断られたり、目の見えない人以後ろから声をかけて驚かれてしまったり、横断歩道の途中で止まってしまったおばあさんの背中を押して歩道まで進めようとしたら「痛い」と言われたり、失敗だらけだという。でも知らない事や分からない事だから、試行錯誤をして覚えていくしかないのだと言う。

例えば、ベビーカーを押しているお母さんの苦労は、母は経験しているのでよく分かるそう。だ。「助けてほしい」と言われなくてもどう手助けしたら相手が助かるのか想像がつくと言う。しかし、障がいのある方や高齢の方は、どういう助けがいいのか、ベストアンサーが分

からないそうさ。だから、試してみるしかないという。できれば困っている人が気軽に声をかけられる世の中になるといいと言っていた。

以前、母と歩いていたら手押し車を引いたおじいさんに声をかけられた。おじいさんは自動販売機で飲み物を買いたい、背が届かなくて買えないのでかわりに買ってほしいというのだ。母は嬉しそうにお手伝いをしていた。

このおじいさんのように自ら、助けを要請することはとても有意義だ。援助を必要とする人はもっと「どういう助け」が必要かを発信した方がいい。その方が助けやすいのだ。助けを求める事を遠慮しないでほしい。手助け出来る事は喜びでもあるから。

私は「人のためにした事は、巡り巡って必ず自分もしくは自分の大切な人に返ってくる」という母の思いを心に刻み、困っている人を勇気を出して助きたい。失敗もスキルアップにつながると信じて。

助け合いで世界中にもっと幸せな笑顔の連鎖が起きると思いたい。

最優秀賞

日揮社会福祉財団ふれあい賞

「障害者と生きる」

秦野市立北中学校

二年 福本 雅治

私の父さんは障害者です。三年前に倒れて高次脳機能障害になりました。初めは、私のことすら覚えていなくて、すごくシヨックでした。普通の生活が出来るようになるまでおおよそ一年かかりました。その間父さんは、仕事に復帰出来るように、職業センターに通っていました。中途障害者の父さんは、今までの生活も出来なくなつたことへのとまどいから、声を荒げることもありました。その声を聞きたくない私は、ゲームに夢中になりました。父さんもすごく辛そうで、大変なことは分かっているのですが、それを支える母さんは疲れきっていました。私達兄弟は、それを目にするたびに、心が苦しくなりました。県や市の相談にも行ってみました。障害者本人の相談は出来るものの、父さんは自分のことを上手く説明で

きないので、結局何も解決出来ずに終わってしまいました。苛立つ父さんを見て、自分には何が出来るのか、悩みました。目に見えて良くなることがない父さんに、現実が嫌になって、私はゲームに逃げるようになりました。ゲームをしている時だけは、何もかも忘れられました。それでも毎日が過ぎていくので、このままではいけないと思いました。そこで、お昼の用意が出来ない父さんに代わり、私がカップラーメンを作って一緒に食べたり、対戦ゲームをして父さんがさみしい思いをしないように一緒に過ごしました。日によって体調や気分が悪くなる父さんとの会話は、とても難しいですが、毎日話しかけるようになりました。何が出来なくて、何が辛いのか、徐々に父さんの障害を理解出来るようになりました。少しずつ、日常生活を送れるようになってきました。私は、今の状況をあたり前だと感じるようになりました。ですが私は、今までとは違う父さんを、今でも受け入れられません。どうしても、昔と比べてしまいます。別人になってしまった父さんは、私の父さんではありません。私の父さんは三年前にいなくなっただと思うことにしました。今の父さんを、一人の人としてつき合うことで、私は今を生きていこうと考えました。そうしなければ、私は乗り越えることが出来ないのです。これが正しい方法なのか、私にはわかりません。障害者と共に生きるのが、当たり前になった今助けてほしいと言えない時や、どうしたら良いかわからない時の逃げ場が私には必要です。家族だけでは支えきれない時もあると思います。どうしたら前向きになれるのか、正しい方法は何か、誰が知っているのでしょうか。私は父さんが死ぬまで、共に生きていきます。もう父さんに守ってもらうことはないけれど、それでも生きぬいていこうと

思います。これから先、父さんのように障害をかかえながら生きていくには、どんな支援が必要なのか、もつと周りに伝えていけるようになりたいです。「助けてください。」と言えば、「何をすればいい?」と返ってくるような社会になれば、私のように悩む人が減るのだと思います。

障害者と生きることが障害にならない時代が一日でも早く実現することを願います。

最優秀賞

神奈川県共同募金会会長賞

支え、支えられる社会へ

伊勢原市立伊勢原中学校

三年 森住 芽依

「手えあつたかいねえ」

私はある日おばあちゃんにこう言われました。

私のおばあちゃんは、昔はいろいろなおいしい料理を作ってくれて、外に出た時には猫が何匹もおばあちゃんのうしろをついていくような元気なおばあちゃんでした。だけど今は体調があまりよくなって、介護施設に入院しています。そんなおばあちゃんと面会できる、と聞いた時は、入院してから会える機会が少なくなっていた私はすごく嬉しくなりました。

少しばかり緊張しながら施設内へ入り、おばあちゃんの部屋へと向かいました。部屋に入ると、弱々しくおばあちゃんが寝ころんでいました。あいさつをすると、「めい来てくれたの。

「ありがとうね。」と名前を覚えてくれていたので、今すぐに抱きつきたくなくなるほどに嬉しかったです。手を差しのべてきたので、にぎってほしいのかと思つて私はおばあちゃんの手を包みました。今までたくさん料理を作つてみんなを喜ばせてくれた手。たくさんはたらいてくれた手。私をなでてくれた手。みんなを支えてきた手。私はゆつくりとずっとにぎつて今までのことを思いかえしながらおばあちゃんの優しい温もりを感じていました。

にぎっているとおばあちゃんが私にこう言いました。

「手えあつたかいねえ」

私はすぐにおばあちゃん目を見ました。おばあちゃんは昔のような目にしわをよせる笑顔で、やさしく私を見てくれました。見守つてくれたおばあちゃんの眼差しはとても温かかったです。私はこの時、おばあちゃんには私の温もりがちゃんと伝わっていたんだと感じ、胸がいっぱいになったのを今でも鮮明に覚えています。

帰る時、幸せそうな表情でおばあちゃん手を振ってくれました。部屋のそばに立つている施設の方の前を通り過ぎる時に、いつもこのような方たちが支えてくれるからおばあちゃんは今でも幸せそうなんだ、と感じました。私はその人に感謝を伝えたあとも、支えるっていいなとずっと考えていました。

高齢者の方は、日々家族や友人、施設の方たちなど、さまざまな人に支えられて幸せに「今」を過ごしています。だから私もこれを全力でサポートしたい、支えたい、と思います。

将来、どんな仕事に就くのか、高齢者の方と関わる仕事をするのか、全く関係のない仕事

をするのか、これからのことなんて、まだ誰にも分かりません。だけど私は、どんなことでも「誰かのため」になる仕事をしたいです。これを通して今回おばあちゃんがしてくれたように、人を幸せにして、何かを伝えられるような人になりたいなと思いました。

今日は少子高齢化の時代。そのため、高齢者介護、福祉のあり方が現在の社会の課題です。だから今は若い人、つまり私たちが高齢の方を、社会を支えるべき立場だと思っています。逆に考えると、未来では私たちが支えられる立場になります。その時のため、そして今を生きる高齢者の方のため、ほんの小さな事からでも何かを「支える」ということをしていきたいです。それがめぐりめぐって誰もが、「支え、支えられる」社会をつくっていったら幸せだな、と思います。

最優秀賞

神奈川県社会福祉協議会会長賞

小さな福祉

大磯町立大磯中学校

三年 小江 哲朗

僕は生まれつき手足が不自由で、特に右手と右足が動かすにくい。激しく転倒するリスクがあるため、屋外では装具をつけて生活している。

この障害のせいで不便なことも多い。同学年の他の生徒より運動能力が著しく低いいため、体育や運動会などでの活動がとても苦手だ。

また、どうしても歩く時や立つ時に体が傾き、歩き方も不安定なので、手すりのない階段を一人で登るなどの行動ができない。道路の舗装の割れ目やごくふつうの階段、道端の石や木の根。健常者が気に留めることもなく通過するであろうこういった存在も、僕の行く手を阻む強敵となる。

次に困るのは、からかわれることである。僕の装具や独特な歩き方は嫌でも人目につく。バカにされたり、歩き方を真似されたりしたことが何度かある。僕はそこまで気にするタイプではないのだが、やはりどこかに自分を軽べつする人がいるかもしれない、というのは不安の種だ。初対面の人と会ったときも、ついつい「この人も自分をからかってくるのではないか」と失礼な想像をしてしまう。

このように書くと、僕は日々苦勞して過ごしているとと思われるかもしれない。しかし僕は、自分が幸せ者であるということは疑いようがないと思っている。なぜなら、僕は人に助けてもらうことが多いからだ。両親や医者、理学療法士の方はもちろんだが、何も家族と専門家だけではない。階段を下りるときに支えてくれる人。重い荷物を代わりに持つてくれる人。そしてなにより、障害のことを抜きにして、僕と何の変哲もない会話をしてくれる人。僕から見れば、何気ない日常の中にいる人皆が、僕を支え、助けてくれる恩人なのだ。

小学生のときだった。友達と、僕の足について話していた時のことだ。僕の障害は治るものなのか、と尋ねられたので、治らない、と答えた。すると彼は、満面の笑顔で「きつと治るよ!」と言ったのだ。結論から言うことやはり治ることはないのだが、僕はこの言葉がとてもうれしかった。治るかどうかの問題ではなく、彼が自分を励ましてくれたことに感動したのだと思う。もう三、四年前の出来事だが、きつと死ぬまで忘れないだろう。

不便なことがあるからこそ、自分を支えてくれる人の優しさ、温かさを敏感に感じとれるようになったのかもしれない。

ここまで書いてふと思った。では自分はどうかだろうか。これだけ多くの人に支えられ、助けられておきながら、僕の今までしてきたことといえれば自分のことだけだ。僕も、誰かを支えたり、助けたりしなくてはいけないのではないだろうか。

では、誰かを「助ける」「支える」とはどういうことなのだろうか。さらに言うと「福祉」とは何なのだろうか。

僕は今まで「福祉」という言葉に対して、法律や社会保障制度が関係する「なんとなく難しいもの」というイメージを抱いていた。しかしこの作文を書くことを通して、「福祉」とは皆が暮らしやすいように人々がお互いを思いやることではないかと具体的に考えられた。多額のお金と長い時間をかけ、たくさんの人を対象に行く「大きな福祉」はもちろん立派だ。しかし、まずは近くにいる人を思いやり、それを少しでもよいので行動に移す「小さな福祉」を行うことが大事だと思う。「小さな福祉」もたくさん集まれば、人々がお互いを助け合う「福祉の輪」が広がり、よりよい社会ができてゆくはずだ。

僕は、今までたくさんの人のささやかな善意に助けられ、支えられてきた。僕も彼らと同じように、心の中の「ささやかな善意」を勇気を出して行動に変え、身の周りの人をほんの少しでも助け、支えられる人になりたい。



神奈川県福祉作文コンクール入選者名簿

小学生の部

優秀賞

わたしのゆめ	横浜市立森の台小学校	二年	柳元咲希
名前はおまけかな	海老名市立東柏ヶ谷小学校	二年	東川知生
わたしのおばあちゃん	厚木市立相川小学校	四年	細野陽葵
はじめての手話体験	厚木市立北小学校	四年	山田咲希
「うみとそらのおうち」と私	三浦市立上宮田小学校	五年	神保千実
私の弟	大井町立上大井小学校	五年	青木仁那
未来	小田原市立下府中小学校	六年	瀬戸彩萌
困っている人を助ける社会にするには	伊勢原市立高部屋小学校	六年	平戸彩希
高齢者による運転	寒川町立南小学校	六年	越本菜月
静かなおしゃべりさん達	開成町立開成南小学校	六年	中村天祢

準優秀賞

たよりになるデイサービス

元気をもらう、わかること

二つのドキドキ

「私にできる事」

地域交流を通じて

生きる姿勢

福祉とはみんなが笑顔になること

思いやりで支える社会

気持ちに寄りそう事の大切さ

みんなの笑顔を守るために

横浜市立港北小学校

相模原市立川尻小学校

寒川町立旭小学校

相模原市立鳥屋学園

南足柄市立南足柄小学校

秦野市立渋沢小学校

聖セシリア小学校

伊勢原市立成瀬小学校

寒川町立南小学校

開成町立開成小学校

二年

二年

四年

五年

五年

六年

六年

六年

六年

六年

丸山 凜

小池 真維

常盤 風杏

高橋 日咲乃

出口 実澄

山室 遼平

森山 紀愛

中山 雅菜

竹内 ほか

齋藤 煌日

中学生の部

優秀賞

思いやりのその先へ

だれもが身近にある『福祉』

福祉Ⅱ幸せ

「差別と区別」

子育て世代に優しい世の中とは

「本当の優しさ」

秘密を抱えて生きる家族

障がい者と共に生きる社会をつくるために

個性溢れる明るい未来へ

杖の意味

横浜共立学園中学校

相模原市立清新中学校

横須賀市立追浜中学校

川崎市立塚越中学校

相模原市立串川中学校

鎌倉市立深沢中学校

横浜市立森中学校

川崎市立金程中学校

伊勢原市立伊勢原中学校

松田町立松田中学校

一年

一年

一年

二年

二年

二年

三年

三年

三年

三年

石渡 晴乃

石塚 阜木

中山 聡哉

加藤 大輝

山田 煌人

山田 雄大

古殿 さら

小林 愛珠美

井上 柑凪

佐藤 唯奈

準優秀賞

「あの子が教えてくれたこと」

祖母との関わり方

髪が繋ぐ思い

「誰もが幸せで快適な社会」

謎解きはゲーム（報酬は笑顔）

祖父母を笑顔に

献血の大切さ

高齢者の方への気遣い

幸せのかたち

今でも残る記憶

茅ヶ崎市立第一中学校

茅ヶ崎市立第一中学校

秦野市立西中学校

川崎市立井田中学校

横須賀市立鴨居中学校

厚木市立荻野中学校

伊勢原市立山王中学校

伊勢原市立成瀬中学校

大井町立湘光中学校

松田町立松田中学校

一年

二年

二年

三年

三年

三年

三年

三年

三年

三年

薄葉 咲奈

江種 菜月

八田 悠莉

熊谷 柚希

下川原 羽音

田中 美音

名瀬 結香

中島 結香

浅野 かな

小島 ゆりか

神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 令和6年度版

令和6年12月発行

発 行 者 社会福祉
法 人 神奈川県共同募金会
〒221-0825 横浜市神奈川区反町3-17-2
電話 045(312)6339

社会福祉
法 人 神奈川県社会福祉協議会
〒221-0835 横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2
電話 045(312)4813

印 刷 神奈川新聞社

社会福祉法人 神奈川県共同募金会
社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会